カナダのメディア・リテラシー教育から見える教育像

土井　文博

2004年９月から１年間、カナダの首都オタワで海外研修を行い、メディア･リテラシー教育について調査研究する機会を得たが、そこで見聞きしたものを通して、教育というものを考えたい。

カナダ

カナダはその人口のほとんどが南の国境近くに集中し、人口の約３分の１は、五大湖を挟んでアメリカ合衆国に接するオンタリオ州にある。このオンタリオ州の州都はカナダ最大の都市トロントだが、首都オタワも同じオンタリオ州の東の端に位置し、オタワ川を隔ててケベック州に隣接している。ケベック州はフランス語圏で、フランス語はカナダの第二公用語ともなっており、オタワでは英語とフランス語の両方が遜色なく飛び交っている。

国会議事堂とチューリップ祭り

メディア・リテラシー教育

カナダのメディア･リテラシー教育は、アメリカ合衆国から入ってくる情報の影響を危惧して始まったと言われており、マスメディアから流される情報を鵜呑みにせず、批判的に解釈し、さらに情報発信する能力を身に付けることを目的としている。現在カナダでは、このメディア･リテラシー教育がカリキュラム上うたわれており、メディア・リテラシー教育の先進国として知られている。私が見た限り、実態としては一部の教師が行っているに過ぎないものであったが、それでも日本の教育が学ぶべきものは多いと感じた。

教師と生徒の関係性

日本の教育が学ぶべきものとして、教師と生徒の関係性がある。西欧ではきょうだい間でもファースト・ネームで呼び合う習慣があり、年齢をはじめとし、上下関係を重んじる日本とは大きく異なる。教師と生徒の間でもこうしたファースト・ネームで呼び合う習慣がカナダであるかと言えば、必ずしもそうではない。教師のパーソナリティによるようで、この点は日本と大きな違いはない。教師としての威厳をもって生徒に接することは

デパート「シアーズ」inトロント

当然あるだろうし、高圧的な教師もいるだろう。しかし、こうした「立場」の違いを超えて、旧来の教師と生徒の関係性を改変していく可能性をメディア・リテラシー教育は秘めている。その特徴をいくつか取り上げてみよう。

まず１つ目には、「批判精神を教える」という点にあるだろう。メディアからの情報を含め、物事を批判的に見るという視点は、その延長として、教師が行う授業そのものにも向けられることになる。従来の教育は知識教授型で、教師が伝えることが正しく、生徒はそれを黙って聞く立場であった。確かに、教師が望んでいると思うことを答え、点数稼ぎをしようとする向きが、このメディア・リテラシー教育にもないわけではない。これは、この教育がぶつかる必然的な壁ではあるが、それでは本来の目的には到達できない。

これに関連して、２つ目は、「授業は教師と生徒が共に作っていく」という点にある。批判精神とは、言い換えれば自主的に発想することで、何よりも生徒からの発言が求められる。日本の教育スタイルと違い、欧米では特に生徒からの積極的な発言が授業では求められるが、その発言は教師と対等な立場として行われ、授業の重要な構成要素となっている点が大きな違いと言えるだろう。

３つ目に、対等な立場を保証するものとして、会話のあり方そのものがある。授業や会合にいくつか参加したが、そこでは参加者すべてが自由に発言することを許されており、発言の内容も自由度が高いと感じた。ここがメディア・リテラシー教育の神髄であり、この教育を支える土台だと考えるが、素朴な疑問をどんどんぶつけ合うことによって、教師と生徒が共に意識の共有を図るのである。その場合の教師は、正解への導き手であるというよりも、議論の活性化を促す存在、あるいは話題提供者で、教育の中心は、あくまでも生徒の主体性にある。

最後に、以上の３点からも分かる通り、「答えに正解がない」という点があげられる。もちろん、教師が導かんとする「望ましい答え」は存在する。しかし、それを露骨に打ち出しては、批判精神も自主性も対等性もすべて吹き飛んでしまい、授業の意味そのものがなくなってしまう。教師に求められる役割とは、むしろ、生徒の様々な意見を引き出し、そこから発生する議論の一参加者となって、生徒と一緒に自分たちの答えを築き上げることにある。答えを築き上げるこのプロセスこそが重要なのである。

大学教育での可能性

これまでは、高校を念頭に置いて話をしてきたので「生徒」という言葉を用いたが、高校までの「生徒」を大学での「学生」に置き換えても同じである。メディア・リテラシー教育が持つこうした特性は、高校よりもむしろ大学になじみやすい。大学の新入生に対して私たち大学の教員が口にする「生徒」と「学生」の違いも、以上４つの点をそのまま含んでいる。つまり、知識を与えられるまま受け身的に受講するのではなく、自分で考える癖をつけ、自分の関心に沿った聞き方をする能動的受講、教師の言うことを正解と思わず、一意見として参考にし自分の答えを見つける主体性、これらは、「大学生」、別の言い方をすれば「大学人」に求められる素養である。近頃、この大学生としての自覚や誇りが

薄れ、資料や答えをいつまでも先生に求めようとする高校生気分の学生と、それに追随しようとする教師も見られるようだが、それでは「大学」ではなくなってしまう。このように、メディア・リテラシー教育は、大学教育との親和性が高い。こうした能動性と主体性は、単なるメディア教育に留まらず、大学でのあらゆる教育に通ずるものである。

教師用のメディア教育研修でのひとコマ

ホスピタリティ

現在、サービス業を中心にホスピタリティという言葉が使われるようになった。これは、「おもてなし」と訳されたりするが、その意味するものはもっと深く、人間関係や生き方にも関わってくる概念である。現在私はホスピタリティ・マネジメント学科に所属し、大学でホスピタリティに関する講義やゼミを受け持っているが、メディア・リテラシー教育は、このホスピタリティとも通じる側面がある。人間関係で言えば、「対等」がうたわれているからである。たとえば、顧客と労働者の関係も、従来は主従関係にあり、「お客様は神様です」という考えのもとにサービスが提供された。この「サービス」と「ホスピタリティ」は区別されるもので、後者においては、提供する者も享受するという互恵の関係にある。こうしたものの考え方は、社会一般の人間関係においてもそのあり方を変えていくであろうし、教育の現場においてもますます望まれてくるだろう。

おわりに

これまで、メディア・リテラシー教育の特性から、これからの教育像を描いてきたが、この中には、学習意欲の減退という今の教育が抱える問題を解消するヒントも隠されているように思う。何かを学んだり考えたりする際に必要なのは、何よりもモチベーションであり、そのモチベーション作りのためには、子どもの主体的な関わりが欠かせない。教師や大人が敷いたレールを歩まされていると感じることなく、心から自分が学びたいという意欲を持つためには、授業の営まれ方そのものがそれを促すものでなければならない。そうした授業のあり方の一例として、このメディア・リテラシー教育を見ることが可能であろう。

（本研究所研究員　社会学）

クリスマスでライトアップされた国会議事堂